



## 反政治機械

——レソトにおける「開発」・脱政治化・官僚支配——

ジェームズ・ファーガソン 著

石原美奈子・松浦由美子・吉田早悠里 訳

東京 水声社 2020年 464p.

1990年に出版された開発人類学の古典的名著の翻訳である。

舞台は1970～80年代のレソト。アパルトヘイト体制の南アフリカに周囲を囲まれていたこの小国には、二国間援助機関や国際機関、NGOなどから、不相応な規模の援助が流れ込み、多種多様な「開発」プロジェクトが実施されていた。本書の議論は、そうした「開発」プロジェクトのひとつである「タバ・ツェカ・プロジェクト」の分析を軸に展開する。同プロジェクトの計画に書き込まれていた目的——営利目的での家畜飼養の促進、地方分権化など——はことごとく達成されず、頓挫する。そのような失敗を、援助機関職員により書かれた現状分析や処方箋が、いかに現地の社会構造や経済状況、政治的利害関係の実態を見誤ったものであったか、という観点から説明するだけであれば、本書がここまで反響を呼ぶことはなかっただろう。

本書の白眉は、「開発」プロジェクトが無様なまでに失敗してもなお、結果として、官僚的国家権力の拡大という、意図せざる、実質的な効果を生み出すことに着目した点にある。「開発」の問題系においては、貧困は技術的な問題へと矮小化され、貧困にあえぐ人びとの苦しみは、あくまで技術的に解決可能であるとみなされる。したがって「開発」プロジェクトは、自らの役割が政治的であることを決して認めないが、実際にはそうした中立で技術的な装いのもと、官僚的国家権力の拡大という、政治的にきわめてセンシティブな帰結がもたらされてしまうのである。このことを著者は、SFの物語に出てくる、スイッチを切り替えるだけで重力の作用を停止できる「反重力機械」のアナロジーで、「反政治機械」と呼ぶ(pp.374-375)。

原著出版から30年を経て、開発のトレンドも変化している。やや戯画化された感もある本書の描写には、古さも感じられるかもしれない。しかし、さまざまな開発プロジェクトの失敗が絶えず繰り返されるなか、失敗の原因や責任を特定の主体に求めるのではなく、(本書で一貫して用いられているカギカッコ付きの)「開発」という問題系そのもののなかから理解しようとする本書の視角は、いまでも多くの示唆を与えてくれるものである。

理論的に難解な内容であるにもかかわらず、翻訳はとても読みやすい。訳者陣の仕事に拍手を送りたい。

牧野 久美子(まきの・くみこ/アジア経済研究所)

